

(2. サービス提供に関する講義及び演習「個別支援会議の運営方法」)

【演習】個別支援会議の運営方法

演習用事例「水道橋久さん」

水道橋久さん（現在、27歳）は軽度の知的障害（療育手帳B2）がある。特別支援学校の高等部を卒業後、木工が好きで集中できることもあり製造部品を作る工場で働いていたが、上司が変わり、厳しい指導を受けることも増え、精神的不調を訴えるようになり退職してしまった。

水道橋久さんが退職して半年後、大工をしていた父親が通勤途中の事故に遭い仕事ができなくなってしまった。父親は久さんの面倒が見られなくなったとして市役所に相談をした。久さんも「父に迷惑をかけたくない」として、「将来は一人暮らしをしたい」「3年後くらいにはまた働きたい」という目標を持ち、グループホーム「ピアハウス」で暮らしながら、就労継続支援B型事業所「スマイル」に通うことになった。ピアハウスでは昆虫図鑑を見て過ごしたり、スマイルでは休憩時間に友人と昆虫の話をして楽しんでいた。

それから2年が経ち、「ピアハウス」での暮らしにも慣れて一人暮らしのための生活スキルが身に付いてきた。「スマイル」では2年の間に職員も異動でだいぶ変わってしまったが、本人は持ち前の手先の器用さと集中力を活かし安定して作業に取り組むことができたため、6ヶ月前から就労移行支援にサービスを移し、就職の準備として職場体験に参加したところ、企業からは作業能力の高さを評価された。

しかし、実習後の久さんは表情も沈みがちで、「スマイル」での作業中にはトイレに行くことが多くなるなど集中できていない様子が見られ、そのうちに休みも目立つようになってしまった。担当職員が本人と話してみると「すみません、がんばります」と言ったため特に気に留めていなかったが、その後も状況は改善していない。

「スマイル」サービス管理責任者として異動してきたばかりのあなたが、久さんの個別支援計画を確認したところ「一般就労して立派な男になるため、職場体験に積極的に参加する」という支援目標となっていた。